【論　文】

アッティス　―ヴィア・ラティーナ・カタコンベ壁画と古代末期のシンクレティズム―

宮　坂　　朋

はじめに：掘削・図像・壁画制作時期
(1) 前室Ｄ壁画男性像のアッティス的側面
(2) 墓室Ｅ女神再考
おわりに：ヴィア・ラティーナ・カタコンベ壁画と古代末期のシンクレティズム

はじめに

改めて述べるまでもなく、ローマのヴィア・ラティーナ・カタコンベ（あるいはヴィア・ディーノ・コンパーニの地下墓）は、４世紀のローマにおける最重要な地下墓であり、転換期である古代末期文化についての貴重な資料である。フェルーアの発見と報告以降[1]、取り上げられることのなかった部屋Ｄの壁画に描かれた男性（図１）の図像について解釈を行うのが、この論文の目的である。

図１．アッティス、ヴィア・ラティーナ・カタコンベ、前室Ｄ、墓室Ｅ側壁面上部

部屋Ｄは墓室ＡとＢの掘られた通廊から直角をなして延びる通廊４の先に作られたもので、墓を持たず[2]、墓室Ｅおよび墓室Ｆ、Ｇのいわば前室となっている（図２）。床のレヴェルは、E-Fの天井と床の高さが揃えられ（図３）、D-E-Fが一連のものとして構想されていたことを想起させる[3]。トロンツォは、カジャーノ・デ・アゼヴェドの観察を継承し、この前室ＤをＥ、Ｆと一連の時期とし、部屋Ｇはもともと墓室Ｅと同じような奥壁にアルコソリウムのある墓室として構想されたが、計画変更されて、通路となったと考える[4]。この計画変更説は広く受け入れられている。

前室Ｄは、天井は3,13ｍの高さの交差ヴォールト状で、その中央にメダイヨンが取り付けられる。入口のある壁面左右には円柱が掘り出され、漆喰が塗られて偽大理石の彩色がされる[5]。円柱は

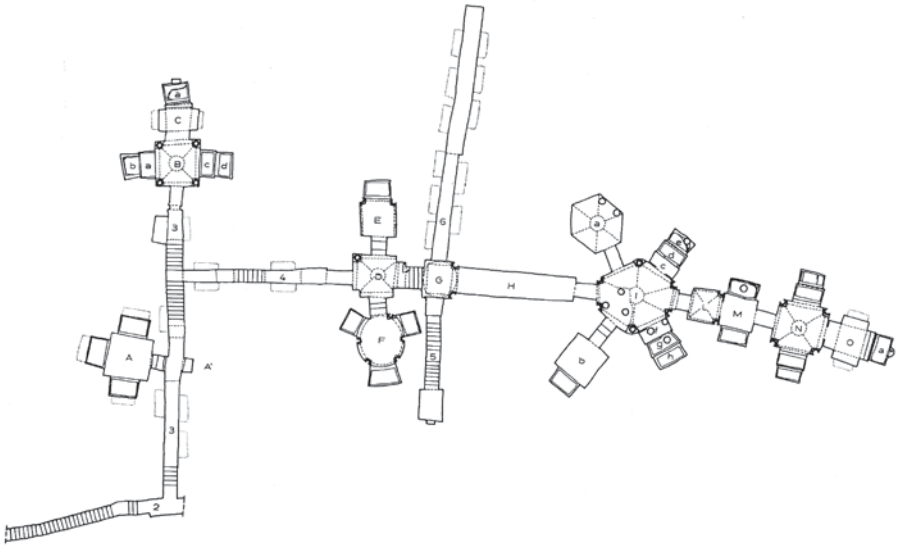

図２．ヴィア・ラティーナ・カタコンベ、平面図
（La Arquitectura del Ipogeo de la Via Latina en Roma, 1994より）

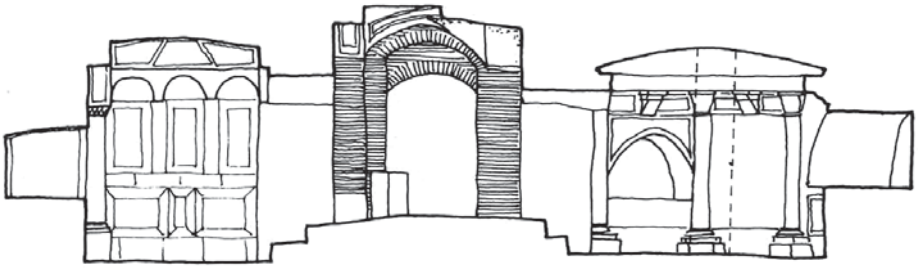

図３．D-E-F断面図
（La Arquitectura del Ipogeo de la Via Latina en Roma, 1994より）

本来、部屋の四隅に立っていたと考えられるが[6]、ベースから柱頭部分まで残るのは入口と墓室E側の隅の１本のみである。四辺の壁面上部には、アーチがかかり、さらにその上にヴォールトの載る霊廟の建築を模倣する。保存状態は悪く、特に東側（墓室F側）は完全に崩壊する。

絵画装飾に関しては、赤、茶、黄、深緑を使用し、区画線は、赤く細い線を使用する。モザイク起源の装飾模様が豊富であり、格間や擬似大理石パネルを描くなど、建築再現への高い意図が伺えるといえる。これらの特徴は、後に続くG-Oと共通する。

壁画の図像は、入口外側上部にフォッソル（墓掘り人）（図４）、トロンツォが詳細に検討した障柵のプット（図５）、天井の四隅に株とそこから立ち上がる実のついた二本のブドウの木[7]（図６）、天井に花文、天井と四壁面の間のアーチ正面にロゼットと花びらの花綱、アーチ下に多種類の装飾

図4. フォッソル、前室D入口

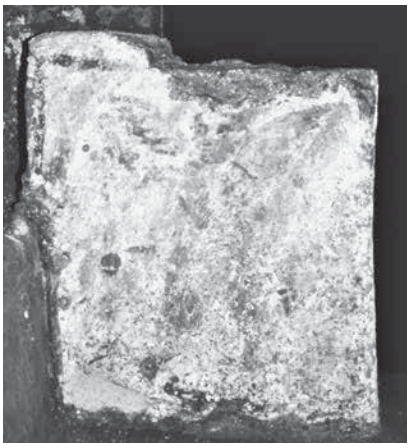

図5. プット

文（入口＝ロゼットの入った格間、左＝両端の花かごから立ち上がる小さな赤い花の花束の連続、奥＝ロゼットと楕円モティーフの連続文（図7）[8]、入口壁面上部の半円形をなす部分の中央パネルには、右手に王冠、左手に皿を持つ、袖なしトゥニカの若い女性、その左右の三角形のパネルには飛翔する鳥が描かれる。左壁面中央パネルには、マントをなびかせた裸の少年（図1、図9）が描かれ、その左右の三角形のパネルには、ブドウの実の入った鉢の上で休む鳥（左）、花籠（切り株ではなく）の上で休む鳥（右）が置かれる。奥壁上部には貝殻モティーフが置かれる。壁面下部には、疑似大理石が描かれるが、赤と茶色で斜めの平行線が何本も引かれて、D-Oのほかの墓室同様、磨かれた大理石の反射を表現している。

図6. 前室D天井

図7. 奥壁アーチ下装飾

部屋Ｄの壁画の制作時期について、発見者のフェルーアは、異教図像が多数採用されていることから、320～350年とし[9]、フォッソーレ図像の研究を行った、コンデ・グエリは、330年説をとる[10]。ドリーゴは、D-E-Fの３室を同時期（セクターII）とし、装飾的華美は欠けるものの、表現主義に強く引き付けられた、いわゆる「美様式（スティレ・ベッロ）」の最後の段階である350年頃に年代付ける[11]。トロンツォは、A-Cの掘削と壁画装飾をプレ・コンスタンティヌス朝とし、D-Oを４世紀の半ばから後半としているが、特にＤの壁画は、奥壁アーチ下に使用された楕円とロゼットの組合せられた装飾パタン（図７）が350年以降登場しないことから、制作年代の下限を決定する[12]。ツィンマーマンは、D-Oが同時期に作成されたとするトロンツォ説を継承し、その制作年代を４世紀半ばとする。

筆者の考えでは、部屋Ｄから墓室Ｏの壁画は、人物像の丸い頭や大きな目、ずんぐりしたプロポーションなどが、一貫してアフリカ・モザイクの様式を示していることから、同一時期に制作されたと考える。またこの反古典主義的様式は、テトラルキア時代の彫刻で採用され、コンスタンティヌス帝凱旋門にみられるようにローマの工人によりやや緩和されてローマ化した様式にも通じる。コンスタンティヌス朝の美術は、多様な様式を機能に合わせて使い分けたが、確固とした輪郭線で明確にされた形態への好みも継続したと言える。また墓室Ｏのコンスタンティヌス帝時代のモノグラムやサンタ・コスタンティーナ霊廟のヴォールト・モザイクと共通のモティーフや様式から、350年頃に年代決定することが妥当であると考える[13]。

次に、今までほとんど触れられてこなかった、この前室Ｄの壁画の図像について取り上げたい。

(1) 前室Ｄ壁画男性像のアッティス的側面

この墓室の壁画の図像に関しては、ケッチェ・ブライテンブルッフもスペイン隊も取り上げていないため、実測図が存在しない[14]。

墓室のヴォールト天井いっぱいに、ブドウの収穫場面が描かれて、ディオニュソス・モザイクを模倣した天井画となっており、ディオニュソス的な世界観を前提としている。そのような環境に、先述の様に、北と東の壁面上部の各パネルに１人ずつの人物像が描かれる。北側（入口）には、袖なしトゥニカの少女が正面向きに立ち、やや自身の右手の方向に顔を向ける。ネックレスとブレスレットを身に着け、左手に皿、右手に王冠を持つ（図８）。上部には花綱がかかるが、両側の枠線と結び目を作っている。東側（墓室Ｅ方面）には、若者が描かれる（図１・９）。進行方向を右手で指しつつ、右に歩みを進めるが、左を振り返っている。丸い頭部、ぱっちりした目、子供のようなプロポーションで、アフリカ・モザイクの人体の様式が採用される。頭部は丸く、髪の毛はややふっくらと刈り込まれているか、つば広帽子カウシアを被る。右手で進行方向を指さし、左手に弓と矢を持ち、背に矢筒をかつぐ。編み上げサンダル（フェルーアによるとチョチャーラ）をはく。マントのみ着用し、ほとんど裸で身体の前方がさらけ出されている。

図8. 入口壁面上部（ニンフ）

図9. 左側壁面（E側）上部（アッティス）

フェルーアはこの男女の正体を明らかにしていない。墓室Eに誘導しようとするかのような男性のポーズもあり、イシス－アフロディーテ－デア・シリア－デメテルなど何重にも習合した女神とのかかわりを考える必要がある。弓矢をつがえた若い男性は、エロスやアポロンを想起させると同時に、裸にマントを着用した姿はキュベレー女神の配偶者アッティスをも示唆する。

前室Dの男性像は、様式的にはアフリカ・モザイク的だが、図像的にはフリギア起源のアッティスを想起させるのは、体の前方がさらけ出された服装をしているからである。アッティスについて多様な神話が知られるが、両性具有のフリギアのキュベレー（あるいはアグディスティス）の切断された男性性器から生えたアーモンドの木の実によって身ごもったサンガリオス川の娘ナナから生まれたとされる。アッティスに恋したキュベレーにより、狂気に陥り自ら去勢して死ぬ。死後アッティスの魂は松の木に宿る。狂気の神話を反映し、動きのある姿で表現される図像タイプが多い。

多くの場合、アッティスは、フリギア帽を被り、マントをまとい、フリギア風のズボンであるアナクシュリデスを穿くが、前述のように前を開けて性器を露出することが多い。前室Dの男性は、フリギア風のズボンではなく、編み上げサンダルを履いている。しかし、編み上げの交差する紐は、脚部の前方で数か所にわたって留められたフリギア風のズボンを彷彿とさせるものである。

アッティスの頭部は、たいていの場合、フリギア帽として知られた、先端の折れ曲がった、つばのないキャップである。しかしながら、無帽あるいは、マケドニア風のつば付きカウシアを被った例も知られており、特にパラティヌスのマグナ・マーテル神殿出土の共和政期のテラコッタ製アッティス小像（フィギュリーン）にもみられるものである（図10）。前室Dの男性頭部は、同時期に同じ様式で描かれた、D入口外側のフォッソルや墓室Fのバラムなどと比較すると、やや横に張り出しており、また白っぽく塗られているように見えることから、ローマに導入されて盛んに崇拝された、カウシアを被ったアッティスである可能性がある。

アッティスの持物は、ペドゥム杖、シュリンクス（パンフルート）など羊飼いの属性を強調する

図10. テラコッタ製アッティス小像、パラティヌスのキュベレー神殿出土

持ち物や、タンバリンや仮面（ディオニュソス的狂気の表現）、豊穣の角、果物籠、穀物の穂など（再生する植物神・豊穣神としての属性）、ライオン・犬・鳩などの動物（キュベレー、イシスやアフロディーテとの関連）などアッティスの様々の属性を示す[15]。前室Ｄの男性は、左手に矢をつがえた弓を持ち、背中に矢が入った矢筒を担いでいる。図像タイプは異なるものの、大英博物館蔵のロンドン出土のアッティス像（石灰岩製）など、左手に弓を持つ例も知られる[16]。従って、前室Ｄの男性像は、アッティスである可能性を否定することはできない。

４世紀の四季石棺浮彫において、冬の擬人像はアッティスの姿を借用して登場する[17]。そのため、この前室Ｄにおいても、花を持った皿を持つ女性像（入口上）が春の擬人像を、そしてこの男性像が冬の擬人像を表すという体裁をとっていたとも考えられる。その際、他の破壊された２面に夏と秋の擬人像が表されていたはずである。

前室Ｄの男性像をアッティスと解釈した時に、女性像はどの様に解釈できるだろうか？彼女は若い女性で、王冠と花あるいは供物の載った皿を持つ。首飾り、腕輪、おそらく花冠で身を飾り、袖なしのトゥニカの裾をひらひらとさせている。これは堂々たる女神というより、王権（王冠）と聖性（供物）をキュベレーに捧げる、若い王女あるいはニンフに似つかわしい。アッティスとペアになりうる女性は、サンガリオス川の娘ナナ、ペッシヌスの王（ミダスあるいはガッロス）の娘、あるいは、森の精ニンフのサガリティスである（『祭暦』4,222）。ポンペイ壁画にサンガリオス川のニンフに恋する図像を採用した壁画の前例が知られている[18]。従って、この前室Ｄの女性像はニンフ（おそらくサガリティス）であり、春の擬人像も兼ねる。ニンフは３人一組で表現されることから、破壊されたほかの２面にもニンフが表現されていたと想像できるが、今となっては確認することはできない。

ローマにフリギア起源のキュベレー祭祀が導入されたのは、前204年とされている。ローマの起源がトロイアである（『祭暦』4,272）という前提に従って、ローマの民族的な神性と考えられたことによる。第２次ポエニ戦争時にシビッラの託宣に従って、パラティヌスの丘の最重要な地点にパラ

ティヌスのマグナ・マーテル神殿が建立された。キュベレーとアッティスの祭祀は特徴を異にしていることがすでに指摘されている。すなわち、帝政期に行われた、メガレシア（メガレ・メテル＝キュベレの祭祀）は公的で貴族的な性格を持つ祝日（4月4～10日）だったが、一方でフリギア的習慣の残酷な儀式を含むアッティスの死と復活を記念する祝日（3月15～27日）は、私的で民衆的な性格を示し、共和政期にさかのぼるものである。

4世紀前半の四季石棺浮彫の冬の擬人像にアッティスの図像が借用されたように、アッティスの持つ植物神の枯死と再生の概念は古代末期の形態にも引き継がれた。古代末期のローマにおいて、アッティス崇敬自体は行われたのか？

コアレッリによると、ローマには6か所のキュベレーとアッティスの祭祀に関する遺構が知られている[19]:

(1) バシリカ・ヒラリアーナ（II区、1889年出土、2世紀半ば、聖樹松の木の礼拝）
(2) ウィア・サクラのキュベレーのトロス（VIII区、85-86年建設の小神殿）
(3) パラティヌスのマグナ・マテル神殿（X区）
(4) キルクス・マクシムスのスピーナの上のキュベレー神域（X区、*aedem Matris deum et Iovis Arboratoris*）
(5) マグナ・マテルとナウィサルウィアの神域（XIII区）
(6) ヴァティカンのフリギア神殿（フリギアヌム）（XIV区、カリグラの競技場につくられたもの）

ヴァティカンのフリギア神殿からは、1600年代に発見された入信者の碑文群が知られており、それらは、305－390年に年代決定されている[20]。また、パラティヌスのマグナ・マーテル神殿に関しては、神殿の階段に最近まで置かれていたキュベレー神像（図11）（現在はパラティーノ博物館蔵）ははめ込み式の黒い石の頭部を持つ座像で、毎年神殿の外側に行列で持ち出されたが、394年にスティリコの妻のセレーナがキュベレーの尊像から素晴らしい装飾を盗んだという記事（Zosimo, 5, 38, 2）が知られ、またローマ劫略以降の廃棄の層からキルクス・マクシムスでの4頭立て馬車の競争場面（スピーナの獅子の上に座るキュベレーが描きこまれる）4世紀末～5世紀初めの縁付きコイン（コントルニエイト）が出土している[21]。このように古代末期のローマにおいても、キュベレーの祭祀は知られており、また継続していた。

図11. キュベレー像、パラティヌスのキュベレー神殿出土

このカタコンベの壁画（墓室A, B, C, E, O）には、穀物輸入に

関わる図像、またエジプトに関係する図像が多用されており、筆者は発注者がアンノーナと関わるコルプス・ナウィクラリイである可能性を指摘してきたが[22]、地中海交易の玄関であるオスティアでは、アッティス祭祀の痕跡はあるのだろうか。ローマの港ポルトゥスと港で働く者のために整備された、隣接する都市オスティアには、帝政期の3神域が発見されている。中でもオスティアのキュベレーとアッティスの祭祀の折衷的聖域から出土した小像は折衷的特徴を示すが、そこでは、アッティスは、マルス（アフロディーテの永遠の恋人）、ディオニュソス（ライオンの上に座す）、アポロ、ヘルマフロディトスと習合している[23]。

このようなことから、4世紀半ばにヴィア・ラティーナ・カタコンベという葬祭的環境において、前室Ｄに少年が描かれたとき、それはすでにキリスト教石棺においては四季の擬人像として知られた形であったし、もちろんアッティスの表象の提示する死と再生という概念にぴったりとあてはまるものでもあった。またそれだけでなく、アッティス祭祀がまだ生々しく知られていた時代でもあったと言える。

(2) 墓室Ｅ女神再考

前室Ｄの男性像にアッティス的要素を認めるとすると、同時期に描かれた墓室Ｅの女神像も再考する必要がある。この女神像には、テッルスだけでなく、イシス・フォルトゥーナ、アフロディーテ、デア・シリアなどの多様な神々の習合が認められることを筆者は指摘したが、アッティスとの関連を考慮すると、そこにはキュベレーの要素も認められるはずである。

形態上、墓室Ｅの女神は、ニンブスを結び、横になり、裸の上半身を起こしているが、この姿は大地などに関する多くの擬人像や神性に採用されている。この女神は、豊穣の女神テッルスと考えられてきたが、それだけでなく、アクセサリーやターバンを巻いた髪型、ヌード、バラといった要素がアフロディーテを示し、また、麦やバラ（デメテル）、イシス・フォルトゥーナ（舵、キスタ・ミュスティカ、蛇、フリンジのついた衣）など種々の女神と習合している。

この女神は、麦とバラの生えた薄茶色の大地に横になるが、彼女の背景には、灰色に霞む三日月型の遠景が描かれる（図12）。これは、アレクサンドリア流の風景画を思い出させるが、女神の足元にも灰色の小さな上向きの三日月状のものが描かれており、全体として、「洞窟」を表現していると考えられる。ヴィア・ラティーナ・カタコンベ墓室Ｎにも、ヘラクレスとともに、アルケスティスが後にした冥界が、洞窟として描かれる（図13）。ヴェルギリウス・ヴァティカヌス写本の冥界の表象もやはり同様の洞窟の形であらわされる。これらの洞窟の中は真っ暗である。一方、墓室Ｅの「洞窟」は、墓室Ｎやヴェルギリウスの装飾写本の洞窟よりも、ずっと淡く、また中は明るい。それは、女神の放つ頭光によるものかもしれないし、また洞窟であること明確に表現するのを避けたせいかもしれない。ちょうど同じ墓室Ｅの画面右手の舵があいまいに表現されているのと同様である。

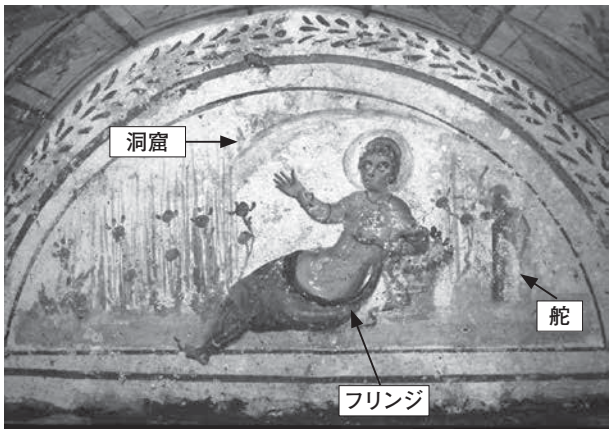

図12. 女神像、墓室Ｅ

図13. 冥界の洞窟、墓室Ｎ

キュベレーと洞窟の関係は何だろうか？

ローマ第XIII区で1700年代に発見されたマグナ・マーテルとナウィサルウィアの祭壇の浮彫には、前204年に行われた、キュベレー女神のローマ入場の姿が表現される（図14）[24]。この祭壇は、ポルトゥスの役人によって使用されたもので、女神は船の上の玉座に右向きに座るが、背後にアーチのかかった入口が描かれる。これは、キュベレーの故郷であるイダの洞窟と考えられているものである[25]。碑文にある*Navisalvia*は、ペッシヌスからローマへ女神神像を運んだ船の名前が神聖化されたものであると同時に、ポルトゥス関係者にとっての航海の安全祈願の込められた言葉であると言える。

図14. キュベレーのローマ入場、キュベレーの祭壇

このように考えると墓室Ｅの女神にキュベレーの姿も認めることができる。実に多様な異教の神々の要素が表現されていると同時に、それぞれの特徴が突出しないように曖昧に表現されているという特徴が指摘できる。それはキリスト教時代であるというだけでなく、全ての神性が、地中海航海の安全や豊かな穀物の実り、死と再生の祈願に関わっているからでもある。さらに重要なのは、神々が多元的であって、かつ、一つであるという点であるだろう。

祭祀上も、キュベレー祭祀とアフロディーテ祭祀は関係づけられていた。例えば、パラティウム

のキュベレー神域付近では、ウェヌス・ゲネトリクス像が出土し[26]、またオスティアのマグナ・マーテルの神域でも同様にウェヌス・ゲネトリクス像が出土している[27]。これは、小アジアや地中海東岸においてアフロディーテがキュベレーとして崇められたことにより、またキプロスでは、アフロディーテ、アスタルテ、キュベレーの三者は完全に一つの女神として混同され、アッティスは、永遠のキュベレー・アフロディーテの愛人と呼ばれていた[28]が、それがローマにも導入されたからであろう。

おわりに：ヴィア・ラティーナ・カタコンベ壁画と古代末期のシンクレティズム

これまで述べてきたように、ヴィア・ラティーナ・カタコンベの前室Dの男性像にはアッティス的側面が認められ、また、墓室Eの女神像にも、キュベレー的側面が認められることが分かった。アッティス的な側面は、形態と内容の両方の点から選択されたものであった。またヘレニズム期から盛んになったシンクレティズムは、古代末期における異教の一神教への動きに乗ってクライマックスに至った。

この墓地の発注者は、地中海交易に従事した者であって、改宗が頻繁に行われた、宗教的流動性の高い古代末期という時代の中で、何よりも職業が円滑に運ぶことを祈念した、ローマ人としては最も普通の人々であった。

このように一つの画像に多元的な内容を盛り込む表現方法は、地上のバシリカ装飾のやり方を準備したものである。すなわち、5世紀のローマにおけるサンタ・マリア・マジョーレ聖堂の凱旋門型アーチに現れる、《空の御座》には、ペテロの司教座、司教シクストゥスの司教座が、「かつていまし、今いまし、やがて来る」神の再臨とともに表現される。また、凱旋門型アーチの《マギの礼拝》に登場する、謎めいたマトローナ（図15）は、キリスト教以前に使用された概念（図16）や都市の擬人像の姿を借用しつつ、女預言

図15. マトローナ、サンタ・マリア・マジョーレ聖堂凱旋門型アーチ

図16. ネメーシス、ガリア・ベルギカのプラエトルによる奉納浮彫(部分)246年、カピトリーノ美術館

者アンナで表現されるような旧約聖書やユダヤ人教会の擬人像、乙女マリアと対比される既婚者を表現するだけでなく、エジプトとの交易によって利益を上げていた企業家貴族の属していた古い世界の象徴ともなっていると考えられる。このように、一つの像が多元的に解釈されるような図像の提示が通常であるような表象世界を、ヴィア・ラティーナ・カタコンベの壁画は模索したと言える。

---

1 Ferrua, 1960, 57–59.

2 Ferrua, 1960, 25. フェルーアによると、このカタコンベには他に墓の作られていない部屋、G-H-Lがあり、通常の共同体のカタコンベがスペースを最大限使用しているのと全く異なり、発注者の富裕さを示すと考える。

3 Cagiano de Azevedo, M. "Appunti e ipotesi", *RAC*, 45, 1969, 32.カジャーノも、Dは最初からE・Fの両墓室を伴っていたと考えていた。

4 Tronzo, W. *The Via Latina Catacomb Imitation and Discontinuity in the Fourth-Century Roman Painting*, 1986, 8–9. トロンツォはその計画変更の痕跡として、前室Dの奥壁の残存と下部に取り付けられた漆喰塗の煉瓦製の障柵（プットの壁画あり）について検討している。Camiruaga, I. De La Iglesia, M. A., Sain, Z, E. & Subias, E. *La Arquitectura del Ipogeo de la Via Latina en Roma*, 1994, 27. スペイン隊は、トロンツォの観察に基づき、D-E-F-G'を第2期（Fig. 9）とし、計画変更後のD-E-F-G-(~L）を第3期（Fig10, 11）としている。

5 Ferrua, 1960, 25. おそらく円柱は四隅に取り付けられたが、G側には痕跡は残っていない。フェルーアによると、G側の円柱はレンガによるものであった可能性がある。

6 Tronzo, 8–9.

7 Ferrua, 1960, 57によると、東側（墓室E側）には、収穫のために梯子に上るプット（そのうちプットの足と梯子の数段のみが残る）。

8 Nestori, G. "resto di motive decorativoa riquadri e fiori stilizzati."

9 Ferrua, 1960, 93. フェルーアは埋葬自体の時期については、315－360年と考える。

10 Conde Guerri, Elena. *Los "Fossores" de Roma paleocristiana: estudio iconografico, epigrafico y social*, 1979, 36–37.

11 Dorigo, W. *Late Roman Pantings*, 1971, 221.

12 Tronzo, 32–49. トロンツォは、容貌の相似（特に墓室O天井の女性頭部とEのテッルス）や強い輪郭線などのテトラルキアの彫刻と相似する様式的特徴から、D-Oは一つの工房によって制作されたものと考える。

13 宮坂朋「ヴィア・ラティーナ・カタコンベ壁画の様式」『弘前大学人文学部人文社会論叢』人文科学篇　第34号、2018年8月、1–17。筆者は、D-Oに関しては、概ね最近の研究者の考えに従うが、A-Cに関しては、D-Oより遅い年代に属するもの（テオドシウス朝）と考える。

14 Koetzsche-Breitenbruch, L., *Die Katakombe an der Via Latina in Rom*, 1976. Camiruaga, I. De La Iglesia, M. A. SainZ, E. & Subias, E. *La Arquitectura del Ipogeo de la Via Latina en Roma*, 1994.

15 *LIMC*, VIII, 1, 22–44.

16 *LIMC,* VIII, 1, 55（p.26）London,BM 1856. 7-I. I. Aus London. -Harris, E. und J. R., *The Oriental Cult in Roman Britain*（1965）100 Taf. 20. I; Merrifield, R. The Roman City of London（1965）180 Nr.87 Abb. 袖

なしキトン、マント、フリギア風のズボンを穿く。

17 *LIMC*, VIII, 86 & 146.

18 《アッティスと3人のニンフ》、ピナリウス・ケリアリスの家、前70年頃。*LIMC* VIII, 1, 435（p.43）Fresko. Pompeji III 4, 4. Casa di Pinario Cereale – Spinazzola, Pompei II Abb. 669-670; Vermaseren I, 56 Taf. 37. 《サンガリオス川のニンフに恋するアッティス》、ラビュリントスの家、後70年頃。*LIMC* VIII, 436 Fresko. Pompeji VI 11, 10, Casa del Labirinto. – Schefold, K. VergP168 Taf. 170, 4. & *LIMC*, VIII, 1, 44.

19 Coarelli, F. "I monumenti dei culti orientali in Roma Quiestioni topografiche e cronologiche", *La soteriologia dei culti orientali nell'Impero romano*, 1982, 33-67.

20 Guarducci, M. "L'interruzione dei culti nel Phrygianum del Vaticano durante il IV secolo d. Cr.", *La soteriologia dei culti orientali nell'impero romano. Atti del Colloquio internazionale,* Roma 24-28 settembre 1979,（Leiden 1982）109-121.

21 Coarelli, F. "La statua palatina di *Magna Mater*", *Roma caput mundi. Una città tra dominio e integrazione,* Milano, 2012, 226-228. Pensabene, P. "Nuove indagini nell'area del Tempio di Cibele sul Palatino", *La soteriologia del culti orietali nell'Impero Romano*, 1982, 92-93.

22 宮坂朋「カタコンベの異教神：古代末期の宗教観」『弘前大学人文学部人文社会論叢』人文科学篇　第35号、2019年2月、1-16。

23 Maria Floriani Squarciapino, *I culti orientali ad Ostia,* 1962, 11.：すなわちキュベレー神殿の中のユリウス・クラウディウス朝の神域とアッティス神域（2世紀）、ポルトゥスのマグナ・マーテル神殿（*Mater deum Magna Portus Augusti et Traiani Felicis*）、オスティアの聖域である

24 Coarelli, 42-43. *Matri deum et Navisalviae Salviae voto susceptor Claudia Syntyche dono dat*（*CIL* VI 492）ユリウス・クラウディウス朝に年代決定される。

25 *Ibid.*

26 Bartoli, A. "Tracce di culti orientali sul Palatino", *Atti della Pontificia accademia romana di archeologia*, 6, 1942, 223ff.

27 Calza, Guido. "Il Santuario della *Maga Mater* a Ostia", *Memorie della Pontificia Accademia Romana di Archeologia*, 6, 1943, 183-205.

28 Calza, R. "Sculture rivvenute nel santuario", *Memorie della Pontificia Accademia Romana di Archeologia*, 6, 1943, 207-227.